

# アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(7) —1936年に書かれたサルコリ関連資料を中心に、その1—

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities(7)  
— Focusing on Documents Relating to Sarcoli in 1936, Part 1—

直江 学 美 (人間科学部こども学科准教授)  
Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Associate Professor)

## 〈要旨〉

本研究では、1936年(昭和11)年に日本で書かれたアドルフォ・サルコリ(1867-1936)に関連する資料を調査・収集し、報告する。

サルコリは、1936年3月12日に日本で68歳の生涯を閉じた。サルコリの死去に関係して、1936年は新聞や雑誌に多くのサルコリに関する記事が掲載されており、その記事からは、当時の人々がサルコリに対してどのような評価をしていたかが浮かび上がった。

本研究を含めて、最終的には、サルコリの音楽活動および、日本の音楽界に与えた影響を考察する。

## 〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ、西洋音楽受容、イタリアオペラ

## はじめに

筆者はこれまで、1911(明治44)年に来日したアドルフォ・サルコリ(1867-1936)の音楽活動を調査、報告してきた。偶然の来日ではあったが、日本に居を構え、日本で音楽活動や教授活動を行い続けたサルコリは、昭和に入って体調を崩すようになる。その後、1930(昭和5)年を境に体調を悪化させ、1936(昭和11)年3月12日の夜、東京の病院で多くの弟子たちに見守られながら68歳の生涯を閉じた。

本研究では、サルコリが死去した1936年に日本で書かれた、サルコリに関する資料を調査・収集し、報告する。なお、サルコリの死去に関する記事は、新聞記事を中心として「日本の新聞記事に見られるアドルフォ・サルコリ」にまとめたが、本稿では、1936年に書かれた記事や出来事を時系列に並べて考察をおこなう。

なお、表記は出来る限り記載のままとし、( )は筆者の補筆とする。

## 1 1935年の日本音楽界

### 1-1 弟子の活躍

1936年に出版された『音楽年鑑』昭和11年版には、当時の音楽家名の一覧や、前年の1935(昭和10)年に行われた

演奏会等が紹介されている。サルコリの名前、および弟子たちの活動も見られるので、次に記す。

音楽家紹介欄の「東京の部(サ)」に「ア、サルコリー(四谷區仲町一〇)テナー。伊太利シエナに生る。聲樂教授。テトラツイーニと共演せしことあり。オペラ歌手として知らる<sup>(1)</sup>」と紹介されている(大日本音楽協会 1936: 51)。1930年ころから徐々に体調を崩していたサルコリではあるが、入院の前日まで弟子の指導を続けていた。

同じ項目の(シ)の欄には「シエナ会(四谷區仲町一〇、サルコリー方)サルコリーの門下生に依って組織さるゝ研究團體」と、サルコリの弟子によって結成されたシエナ会に関する記載もある<sup>(1)</sup>(同上: 206)。

同号「樂界記録」「演奏」の欄には、昭和10年に行われた演奏会などが開催順に書かれている。サルコリが関係する演奏会については次の5つが取り上げられている。

「三月 サルコリ門下の第三回シエナ會聲樂演奏會(二十日夜青年館)」

「六月 關屋敏子獨唱會(七日夜軍人會館)」

「十一月 二日晝夜二回日比谷公會堂に於ける三浦環夫人の獨奏会によつて華やかにコンサートの幕が開かれた。年こそ五十の上によく出てゐるが、其氣持の若々しさは依然として柴田環時代の情熱を失はず、歌ひ方の妙と聲の美

しは我が代表的歌手たる貫祿を示して餘りあるものがあった」

「關屋敏子秋季獨唱會（十五日夜軍人會館）（…）關屋敏子自作自演の『二人葛の葉』は衣装を着け、妹喜美子の舞踊と共に演ぜられたオペラティック・バレエとして特筆に値する」

「原信子研究所第二回研究発表會（同夜軍人會館）」

これらの記述を並べると、昭和10年はサルコリの弟子の中でもとりわけ優秀であった関屋敏子、三浦環、原信子が積極的に音楽活動を行っていることがわかる<sup>(1)</sup>（同上；256-263）。

三浦環に関しては、1月19日付『讀賣新聞』の「港の話」に「ミラノ市ファシスト團長あてに金一萬四千弗（邦貨四萬八千餘圓）の小切手を送つてきた、といふのでイタリー國民の感激は非常なものだといふ【ミラノ十八日發電通】—多年イタリーにゐた間に示されたイタリー國民の好意に對する感激の印ださうで、エチオピア遠征中の黒シャツ隊兵士に對團品を購入調達する目的のために使用すること、といふ希望が添えてあると<sup>(2)</sup>」書かれている（『読売新聞』1936.1.19）。

サルコリも、ファシスト党へ義援金を送っている。1926年にファシスト党の黨員登録を行ったようである。5通の黨員證明書が残されている（写真1・2）。



(写真1) ファシスト年XIII (1935年)の黨員證明書表紙<sup>(3)</sup>  
(丸山洋子氏提供)



(写真2) 黨員證明書

## 2 サルコリ死去

### 2-1 病に関する記事

2月16日付の『東京朝日新聞』11面に「師よ・早く全快…禱る歌姫達サルコリー翁重態」の見出しで、サルコリが重態になった記事が、病に伏す写真と共に掲載された。

「わが楽壇の『歌の恩人』アドルフォ・サルコリー翁が寄る年波と孤獨な生活に疲れ果て、今重態の體を慶應病院の一室で昏々と眠つてゐる、サルコリー翁の華やかな思ひ出は三浦環、關屋敏子、ベルトラメリ能子、原信子、藤原義江……と花形歌手の教へ子の幼い顔が夢の様に浮かんでゐる事であらう。明治四十四年憧れの日本に來朝して以來、イタリー・オペラの精髓たる『ベル・カント』式發聲法は初めてわが楽壇に珠玉の如きソプラノ歌手を育て上げた、しかしサルコリー翁の晩年は淋しかつた、外國人の音樂家の通弊たる『虚名』と『金儲』はサルコリー翁の氣性には合はなかつた、廿年近くも住みなれた四谷區仲町一〇の自宅は荒れるに任せ障子は破れて見る影もない五間足らずの陋居にピアノと愛猫を相手の淋しい生活だつた（…）十五日午後、慶應病院の『に』病棟第三十八號室—『面會謝絶』の札が淋しく掛かつたドアを押すと、丁度關屋敏子さんが白百合の花束を抱いてお母さんと心配さうに恩師の枕頭に詰めてゐた（…）丈夫なサルコリー翁は數日前突然、發病し多量の出血のため重態に陥つた、たつた一人の内弟子で翁の身の回りをみてゐる長島徳子さん（二三）は驚いて「シエナ會」の肝煎で帝大の眞鍋嘉一郎教授に診察して貰ふと泌尿器系の癌の疑ひがあり一刻も猶予ならぬとの事、恩師思ひのベルトラメリ能子さんはわざわざ横濱からイタリー領事デ・プロスペロ氏を連れて翁の心情をよく勞はり十五日朝、抱く様にして病院に移したのであつた（…）來る三月廿八日には再び翁のため『謝恩音樂會』の計畫が進められてゐたが果して翁は再び昔の感激を語る事ができるだらうか? <sup>(4)</sup>」（『東京朝日新聞』1936.2.16）

サルコリの病状に関して、『婦人畫報』5月号の「サルコリー先生を憶ふ」の「病氣」に詳しく書かれている。

「去年の十二月二十五日から先生は顔面神經痛にかゝりました。之には先生もそれまで毎日あの四谷から赤坂へかけての庭園の様なお堀端を散歩するのを何よりの楽しみとしておられたのを止めなければならなくなつたのでほんとうに淋しさうにしておられました。しかしお弟子さん達によつて三月二十八日公會堂で謝恩音樂樂會が盛大に行はれる計畫がすゝんでゐたものですから、大變喜んで、一日としてお稽古は休まれませんでしたが（…）二月十二日古いお弟子さんである大阪の廣瀬病院院長勝代夫人が神經痛の電氣の機械をもつてお見舞にきて下さつたのですが、私共がその夜クズネツオワ夫人告別演奏會から歸つてきますと、先生は多量の出血をしておられたのです（…）翌十三日の午

前は先生は平常通り六人のお弟子さんのお稽古をしてお休みにになりました。そして又悪くなりましたので十四日夜帝大の眞鍋博士の御診察を仰ぎますと『之は大變悪い。もう神様に頼るより外ないでせう』との宣告。驚いて翌十五日朝慶應病院に入院させました。その朝家を出る時も先生は心配さうにしてゐる大勢の弟子達に、『二、三日でよくなつて歸つてきますから』と、そして『私こんなに元気』と足ぶみして見せておられました<sup>(6)</sup> (長島徳子1936: 124-126)

サルコリの容態についてまとめると、1935年の年末に顔面神経痛にかかり、日課であった散歩に行くこともできなくなったサルコリは、2月12日に大量出血をおこす。13日には通常通り弟子の稽古を行ったが、翌14日に帝大の眞鍋嘉一郎の診察を受け、15日の午後慶應病院に入院することとなった。サルコリは、泌尿器系の癌の疑いがあり、一刻の猶予もない状態である。また、3月28日に弟子たちによる「シエナ会」の演奏会が計画されているとのことである。

## 2-2 危篤に関する記事

2月15日に入院する時には、足ぶみをして、元気な様子を披露していたサルコリも、その後徐々に衰弱していく。3月10日に三浦環がサルコリを見舞った時は、まだ三浦の言葉にわずかにうなづくことができたサルコリであったが、その日を境に危篤となった。

「慶應病院に病む我樂壇の恩人ア・サルコリー翁 (六九) は十一日危篤に陥った、老衰と泌尿器系統の障害で二月十五日來の入院生活であつたが衰弱は加はるばかりだつた、翁の出身地イタリア、シエナの町にちなんで名付けた『シエナ會』のお弟子さん達三浦環、原信子、關屋敏子、ベルトラメリー能子、三上孝子、小原威子さん達がこの二十八日翁のために開くことになつてゐた謝恩音樂會のことをひどく喜んで、主治醫長光博士や看護婦をつかまへては

私の一番えらいお弟子さん達の音樂會、環さんも、  
ベルトラメリさんも、關屋さんも、原さんもみんな  
出る、あなた方もぜひいらっしゃい

といひ續けてゐた翁が、十日からはもう口をきく元氣もなくなつた(…)皇軍慰問のため滿洲に旅行中であつた三浦環さんも『環さんの顔が見たい』といふ翁の願ひで豫定を切上げて十日午後病床に駆けつけた(…)環さんの顔を見て安堵したのかそれから容態はぐんぐん悪化したのであつた<sup>(6)</sup> (『報知新聞』1936.3.12)



(写真3)「病篤き恩師を圍み歌姫たちの歎きサルコリー氏をめぐる美しき師弟愛<sup>(6)</sup>」  
(右から：丸山徳子、一人おいて、帽子をかぶっているのが三浦環、その隣がベルトラメリ能子。左から3人目の女性は原信子)

これは3月12日付『報知新聞』7面に「病篤き恩師を圍み歌姫たちの歎きサルコリー氏をめぐる美しき師弟愛」のタイトルで掲載された記事と写真である。写真からは、サルコリが横たわる病室に、記事の中に名前が出た弟子の他にも多くの関係者が集まっている様子がわかる。この他にも、同じ日の『時事新報』に「臨終迫るサルコリー翁死の床に最後の發聲」のタイトルで、サルコリが危篤となった記事が載せられている。記事の中には見舞いに來ている弟子や関係者の名前が書かれており、前述した弟子の他に、エンリコ・ロシー、渡邊光の名前が記されていた<sup>(7)</sup> (『時事新報』1936.3.12)。

同日の夕刊では『時事新報』に「サルコリー翁危篤」の記事が、『讀賣新聞』にも「サルコリー翁重體」のタイトルで、サルコリが危篤になったという記事が掲載されていた。朝刊夕刊問わず、多くの新聞にサルコリの危篤を知らせる記事が掲載された。

## 2-3 死去に関する記事

サルコリは、3月12日午後9時45分に息を引き取る。サルコリ死去の記事は3月13日付の『東京朝日新聞』『東京日日新聞』『国民新聞』『時事新報』『都新聞』『讀賣新聞』などに、翌3月14日の『時事寫眞速報』にも記事が掲載された。



(写真4)「我聲樂の父サ翁遂に逝く<sup>(8)</sup>」

各新聞の中でも特に『讀賣新聞』『東京朝日新聞』が大きな紙面を割いて、サルコリ死去のニュースを取り上げている。



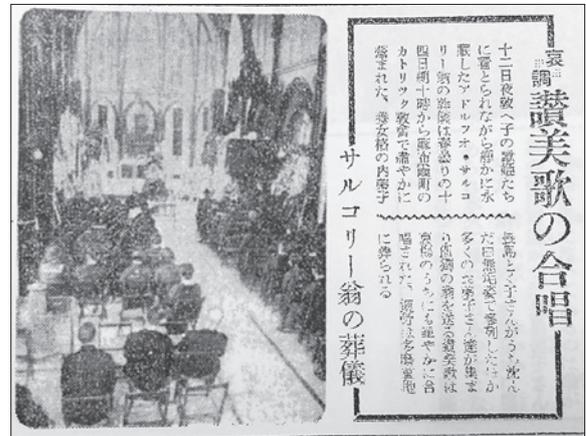
(写真5)「臨終の顔に涙の聖水・・・」(「翁の臨終を取り巻く三浦環女史(白服)その後が能子女子、その右勝代さん、背を見せるのが原信子女史」の説明あり)

記事によると、サルコリは、危篤時から病室につめかけていた多くの弟子たち見守られながら息をひきとった。サルコリの生前の言葉により「ファシストの制服の黒シャツをさせ」「日本の地に埋めてくれ」とのことであった。また、告別式は14日午前十時から麻布区霞町のカトリック教会で行われ、多摩墓地に埋葬されるとの記載があった<sup>(9)</sup> (『讀賣新聞』1936.3.13)。



(写真6) 教会での集合写真<sup>(10)</sup> (丸山洋子氏提供)

続く15日には、「哀調讃美歌の合唱 サルコリー翁の葬儀<sup>(11)</sup>」(『讀賣新聞』1936.3.15.3面)「霊前に顔づく歌姫達けさ・サルコリー翁の葬儀<sup>(12)</sup>」(『東京朝日新聞』1936.3.15.夕刊2面)のタイトルで、カトリック教会で行われた葬儀の様子が写真とともに掲載された。



(写真7)「哀調讃美歌の合唱 サルコリー翁の葬儀<sup>(11)</sup>」

サルコリに関する新聞記事を検索すると、サルコリの入院、危篤、死去、そして葬儀にわたるまで記事が出てくる。サルコリは当時、音楽関係者のみならず広く一般に知れ渡っており、かつ、重要な人物であると認識されていたことが改めて分かる。

### 2-4 サルコリの追憶記事

3月13日にサルコリ死去について大きく取り上げていた『東京朝日新聞』は15日に、そしてさらに16日にもサルコリ関連の記事を取り上げている。

「サルコリ翁が、枯木の倒れるやうに逝去した。(…)彼は精も根も、凡て日本の聲樂界の進歩の爲めに傾け竭してしまつたのだ。もし彼が外交官、學者、法律家であつたら、どんなにか日本の政府から篤く表彰されたらう。翁に勲章を賜はるやうにと運動もないではなかつたが、何分にも『この際』の事とて、何もかもダメになつてしまつた。無慾な翁の事だから、別に何にも欲しくはなかつたらう。三浦環、原信子、ベルトラメリ能子など、彼の故國で敬愛を受けてゐる人達に圍繞されて昇天した方が、彼としては勲章に飾られて死ぬよりは本望であつた事は誰でも想像のつく事だ。葬儀の終りに、イタリア大使、ロッシ、ベレッティ等の人々が、黒シャツを着た姿で棺側に立つて、ファツシヨの擧手の禮で遺骸に敬禮した有様は、まことにすさまじくも勇ましかつた。翁は定めし地下で、『ベネ、ベネ』(善哉、善哉)といつて微笑してゐるだらう。が樂壇としては、此の際『ベネ』でない事が澤山ある。第一は日本の聲樂界の大恩人たる翁の葬儀に、上野の音樂學校長をはじめ、私立のどの校長も會葬しなかつた事だ。それに放送局

も怪しからぬ。翁は自身では放送しなかつたが、放送局は翁の門下生の御厄介になつてゐることはないか。就中一番怪しからんのは東京音楽協會だ、樂界の社会的活躍を標榜して居りながら、數多い理事が一名も葬儀に参列してゐない。協會の役員は、大方どこかで坐禪を組んでゐたのだらう。『金がないので仕事が出来ぬ』と口癖のやうに言つて無能の弁解をしてゐる連中なんだが<sup>13</sup>」（『東京朝日新聞』1936.3.16）

この記事では、サルコリは、声楽界の進歩に非常に貢献し、政府から表彰されるに値する人物であると評価されている。また「日本の声楽界の大恩人」であるサルコリの葬儀に、東京音楽学校や私立の音楽学校の校長や東京音楽協会の理事が誰一人として参列しなかつたことは懸念すべきことであると指摘している。

日本の声楽界に、イタリア人テノール歌手のサルコリが加わつたのは1911（明治44）年である。来日当時のサルコリは「イタリア人テノール歌手」と珍しがられていた。しかし、1920年代に入り、弟子が活躍しだすと状況が少し変わってくる。サルコリや弟子たちは「イタリア系」として、ドイツ人教師が中心であつた東京音楽学校の「ドイツ系」と対峙する存在とみられるようになっていく<sup>14</sup>（直江学美 2018; 25-32）。記事中に名前が出てきた東京音楽協會も、「ドイツで学んだ最長老の理論家」で「楽壇の頂点に立っていた」田中正平が昭和7年から理事長をつとめている<sup>15</sup>（赤井励 2006; 217）。『東京朝日新聞』の記事はまさに「イタリア系」対「ドイツ系」を意識したものであると考えることができる。

サルコリの死去に関する記事を追っていくと、サルコリが当時の日本にどのように見られていたかがわかる。例えば、新聞記事や雑誌では「ドイツ流の發聲法に對し『ベル・カント』式發聲法を傳へ日本のオペラ運動に基礎を築いた<sup>16</sup>」（『東京日日新聞』1936.3.13）「我が聲樂界の恩人（…）イタリアオペラの精髓ベルカント式發聲法を紹介した<sup>17</sup>」（『国民新聞』1936.3.13）「聲樂界の恩人<sup>18</sup>」（『都新聞』1936.3.13）「わが樂壇最大の恩人<sup>19</sup>」（『讀賣新聞』1936.3.13）「サルコリーが日本へくる以前には、日本に伊太利聲樂と云ふものは全く傳へられてゐなかつた<sup>20</sup>」（黒百合子 1936; 77）「イタリアの音楽を日本に紹介した樂壇の恩人故・ア・サルコリー翁<sup>21</sup>」（『時事新報・城南時事、山手時事』1936.9.15）などの言葉が並ぶ。これらは、日本におけるサルコリの存在意義が、イタリア声楽やイタリアオペラを日本に伝えたことにあり、また「恩人」や「大恩人」との言葉からは、当時、サルコリが日本声楽界に非常に貢献した人物であると人々に認められていたことが伝わってくる。

また、サルコリの弟子や音楽関係者の言葉には「半生を

ベルカントの先生として、日本の樂界に盡されたアドルフ・サルコリー先生<sup>22</sup>」（原信子 1936; 104）「ベルカントの父、我國聲樂界の恩人とたたえられた先生<sup>23</sup>」（井上けい子 1936; 10）「日本に於けるベルカント唱法の親<sup>24</sup>」（伊庭孝 1936; 52）「イタリア式唱法ベルカントの教授に従ひ、多くの英才を其門下より出す翁<sup>25</sup>」（『音楽年鑑』1937; 373）など、イタリアの發聲法を指す用語「ベル・カント」が多く使われている。サルコリは、弟子および音楽関係者からは「ベルカントの父」や「ベル・カント唱法の親」、つまり、サルコリの存在意義が「ベル・カント唱法」を日本声楽界に初めて伝えたことにあると考えていたことがわかる。

## おわりに

本研究では、1936年に日本で書かれたアドルフォ・サルコリ（1867-1936）に関連する資料を調査・収集し、順に報告した。サルコリは1935年の年末から体調を崩し、1936年2月に入院、そのまま1936年3月12日に帰らぬ人となった。日本での生活は25年を数え、歳は68歳であつた。

1936年の新聞記事を追うと、サルコリは、入院から危篤を経て死去するまで、そしてその後の追悼記事も新聞各紙に掲載されていた。サルコリが当時の人々に良く知られていたことが改めてわかる。また、記事や写真からは、病室に多くの弟子や関係者がかけつけて心配する様子が見られ、入院に際して、様々な関係者が協力し、なんとか病状の回復に努めようと奮闘する姿がみられる。

1911年秋に一人で来日したサルコリは、日本で生活する間に多くの弟子を育て、幅広い理解者を得ていた。当時の新聞紙面では、サルコリが亡くなると「イタリアの音楽を日本に紹介した樂壇の恩人故・ア・サルコリー翁<sup>26</sup>」などの言葉を使い、日本にイタリア音楽やイタリアオペラ、そしてイタリア式發聲法を紹介した人物として、連日のように取り上げ、サルコリの功績を称えた。

弟子や音楽関係者の言葉を辿ると「ベルカントの父、我國聲樂界の恩人とたたえられた先生<sup>27</sup>」などの言葉が多く使われていた。サルコリは当時の音楽関係者から「ベル・カント唱法」を日本の声楽界に伝え、ベルカント唱法で優秀な弟子を育てることにより、日本に「ベル・カント唱法」を根付かせた「父」として認められていたことが浮かび上がる。

それまでの日本は、当時の人々の言葉を借りるならば「ドイツ系」であり、ドイツの音楽が主流であつた。そして、その中心にあつたのが上野の東京音楽学校である。サルコリは「ドイツ系」一辺倒であつた日本音楽界に、偶然の来日ではあつたものの「イタリア系」という、これまでの日本になかつたイタリアの音楽やイタリアオペラを伝えた。サルコリの死去に関して1936年に書かれた記事は、サ

ルコリが日本で続けた音楽活動の結果、日本における「ベル・カントの父」として、また、当時の音楽界にとって「大恩人」と言われるまでの存在として、音楽関係者のみならず広く一般市民にも認められていたことが伝わるものであった。

なお、本稿は紙幅の関係上、1936年に書かれた資料のうちサルコリの死去に関するもののみを取り上げた。1936年には他に追悼演奏会に関する記事や、追って掲載とれた各紙誌の追悼記事も多くあり、それらは次稿にて取り上げる。

## 注

- (1) 大日本音楽協会 1936。『音楽年鑑』（共益商社）。
- (2) 『讀賣新聞』1936「港の話」。1936.1.19, 7面。
- (3) 『ファシスト党黨員証明書』1935（提供：丸山洋子氏）
- (4) 『東京朝日新聞』1936「師よ・早く全快…禱る歌姫達サルコリー翁重態」。1936.2.16, 11面。
- (5) 長島徳子1936「サルコリー先生を憶ふ」『病氣』。『婦人畫報』（東京社）1936年5月号, 124-126。
- (6) 『報知新聞』1936「病篤き恩師を圍み歌姫たちの歎きサルコリー氏をめぐる美しき師弟愛」。1936.3.12, 7面。
- (7) 『時事新報』1936「臨終迫るサルコリー翁死の床に最後の發聲」。1936.3.12, 9面。
- (8) 『時事寫眞速報』1936「我聲樂の父サ翁遂に逝く」。1936.3.14。
- (9) 『讀賣新聞』1936「臨終の顔に涙の聖水…」。1936.3.13, 7面。
- (10) 『教会での集合写真』1936（提供：丸山洋子氏）
- (11) 『讀賣新聞』1936「哀調賛美歌の合唱 サルコリー翁の葬儀」。1936.3.15, 3面。
- (12) 『東京朝日新聞』1936「靈前に額づく歌姫達 けさ・サルコリー翁の葬儀」。1936.3.15（夕刊）, 2面。
- (13) 『東京朝日新聞』1936「サルコリ翁の死」。1936.3.16, 9面。
- (14) 直江学美 2018「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(4)」。『金沢星稜大学人間科学研究』第12巻第1号, 25-32頁。
- (15) 赤井励 2006。『オルガンの文化史』（青弓社）217頁。
- (16) 『東京日日新聞』1936「サルコリー翁我樂壇の父」。1936.3.13, 11面。
- (17) 『国民新聞』1936「サルコリー翁」。1936.3.13, 7面。
- (18) 『都新聞』1936「サルコリー翁」。1936.3.13, 15面。
- (19) 黒百合子 1936「樂人の死」。『少女の友』1936.7月号, 74-82頁。
- (20) 『時事新報・城南時事, 山手時事』1936「けふ初の舞臺に」。1936.9.15, 5面。
- (21) 原信子 1936「サルコリー先生を憶ふ」。『明朗』（信正社）1936年5月号, 102-104頁。
- (22) 井上けい子 1936「サルコリー先生」。『音楽月報』（音楽月報社）1936年第5号10頁。
- (23) 伊庭孝 1936「サルコリ氏の功績に就て」。『音楽世界』（音楽世界社）, 第8巻4号, 51-55頁。
- (24) 大日本音楽協会 1937。『音楽年鑑』（共益商社）373頁。